

テネシー・ウィリアムズの作品における 「犠牲者」について

藤 田 秀 樹

Tennessee Williams' Victims

Hideki FUJITA

Abstract

The theme of the hero suffering a violent death is a recurrent one in Tennessee Williams' plays and short stories. Williams' victim-hero is a lonely traveler who cuts himself loose from society in search of truth; and a lover who has compassionate relationships with another human being; and a savior who, like Christ, sacrifices himself for all mankind. Williams uses his victim-hero as a image of modern man seeking to find meaning, self-definition and the authentic life in a world in which everything is in a state of disintegration.

1

Tennessee Williams は、彼自身がエッセイその他でしばしば告白しているように、作品を世に出し始めた当時から異常な暴力を好んで題材とするタイプの作家と見なされていたようだ。暴力が彼の作品を特徴づけるひとつの要素となっていることは確かだが、それは具体的には作品の結末における主人公の非業の死という形であらわされる。例えば *Orpheus Descending* (及びその early version である *Battle of Angels*) の主人公 Val は暴徒たちによって焼き殺される。*Sweet Bird of Youth* の Chance は私刑をうけて去勢される。“One Arm”の Oliver は電気椅子で処刑される。*Suddenly Last Summer* の Sebastian と “Desire and the Black Masseur” の Burns は生きたままその肉体を他の人間にむさぼり食われる。まるで Williams のある種のオブセッションを反映するかのようになりかえし作品に登場するこれら虐殺される主人公の生きざまには、重要な人間観、世界観が含まれているように思われる。Ihab Hassan は *Radical Innocence* の中で、アメリカ小説

は主人公の犠牲の状況の中に存在の意味を求める¹⁾ といっているが、このような視点は Williams の作品にも適用することができる。Williams の犠牲者の主人公の人間像を考察しつつ、彼らの犠牲の状況に含まれる存在の意味をさぐることが本稿の目的である。

2

まず最初に Williams の犠牲者の共通項とでもいうべき要素をぬき出してみたい。第一に彼らの多くは定住すべき場所や定職をもたない放浪者でありアウトサイダーである。彼らの放浪者性の根底にあるものは、社会からのドロップアウトといった消極的なものではなくて、秩序内部へくみ入れられることへの強い拒絶と自由の希求、それに馴致されることのない反逆的本能、Williams のことばを借りれば “something wild” である。同時に彼らは日常的な価値の体系の中では見出すことのできない何かをさがし求める探求者であり、例えば Oliver のように “the center of being” を、また Val のように “the answer to question, I'd been waiting for”